



公益社団法人

日本水産資源保護協会

季報

2025年 **冬** 通巻581

第17巻 第4号

CONTENTS

会長新年のごあいさつ

公益社団法人日本水産資源保護協会会長 高橋 正征 2

◆事業報告 3

令和5年度漁村研究実践活動助成事業
 広島県大崎上島漁業協同組合 マナマコの短期中間育成試験
 令和5年度水産資源保護啓発研究事業(巡回教室)
 岩手県沿岸広域振興局水産部水産振興課 おいしいウニを育てる

◆事業の紹介 11

水産防疫対策委託事業
 令和6年度養殖衛生管理技術者養成研修 概要

◆保護協会イニシャルトーク 13

◆保護協会の認証機関・お知らせ 14

FOOD STYLE Kyushu 15

令和6年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業 16



「第43回全国豊かな海づくり大会～おんせん県おいた大会～」が令和6年11月10日、天皇后両陛下ご臨席のもと、大分県の大分市と別府市で開催されました。両陛下によるマコガレイとマダイの稚魚の放流が別府港で行われました。
 (写真提供:大分県)

年頭のご挨拶

公益社団法人 日本水産資源保護協会
会長 高橋正征



新年明けましておめでとうございます。

国連の食糧農業機関 (FAO) が2年毎にまとめて公表している世界漁業・養殖業白書を見ますと、世界の魚介類の需要は年々増加し、それに合わせて世界の漁業生産量も増産が続いています。2024年に発表された2022年度の結果では、海藻類を除いた世界の魚介類の漁獲量は9,100万トンで、9,440万トンの養殖生産量に抜かれました。有史以来、初めてです。漁獲は1990年頃から横ばいが続いています。FAOの報告を見ると世界の漁獲対象種の1/3が漁獲に堪えない資源量まで低下し、しかもその割合が少しずつ増え続けており、残りの1/2も漁獲の余裕がないというので、このままでは今後の漁獲の増加は期待できません。年々増える世界の魚介類の需要を受け、養殖生産が着実に増加しますから、今後は世界の魚介類の供給では養殖の割合が高まっていくことは明らかです。

ところが、日本の現状はこうした国際的趨勢とはやや異なっていて、2023年には漁獲が284万トンで養殖85万トンの3倍以上を占めています。国内の統計では海藻類が含まれていて、前記の魚介類に限ったFAOの結果とは単純には比較できませんが、日本で養殖生産量が劇的には増えていないことは確かです。

こうした日本の漁獲優位の状況には、私たち多くの日本人がもっている天然物志向が大きくはたらいっているように私は思います。確かに、天然魚介類の持つ味や独特の食感の評価は分かりますが、それに留まらず養殖は様々な薬が使われたり、過密養殖で奇形が生まれるから不安だと、養殖物を避けて天然物を絶賛する傾向が私たち日本人にはあります。この点、欧米とは真逆です。彼らは素性が分からない天然物は危険だが、餌や飼育履歴がはっきりしている養殖物は安全だと考えます。たとえば20年ほど前にハワイでカンパチの完全養殖が始まりましたが、その時、英語名“Amberjack”ではなく日本名のローマ字表記“Kampachi”が使われました。というのはハワイなど熱帯・亜熱帯の天然カンパチは、餌から神経性のシガテラ毒をとりこんで含むものがあるので危険だからと食べません。そこで、現地の呼称ではなく“Kampachi”と呼ぶことで人々に天然のカンパチを想定させない効果を狙ったようです。養殖Kampachiはハワイの人々に好まれ、今では北米からヨーロッパでも広く養殖されるようになりました。

肉類では鳥・豚・牛・羊などの特定種を選んで野生種と異なった肉質と食感の家畜化が進み、現在の私たちは堪能しています。野生の鳥獣肉はジビエとして味わいますが、その量は極微量です。魚介類でも飼育や味をヒトの利用に適するような“家魚”化が始まっていてサケがその筆頭です。日本でもスーパーでは“家魚”化されたサケを養殖生産したものが並んでいます。これからは、魚介類は限られた“家魚”化品種の養殖生産されたものと、多様な天然魚介類の両方になっていくと思われます。肉類ではごく限られた品種の家畜に席卷されてしまいましたが、魚介類では養殖“家魚”と天然の双方の良さが味わえるようになることを願っています。それには、私たち日本人は養殖魚介類を避けるのではなく、その良さを評価するという認識が必要となります。これは魚介類利用のグローバル化に乗り遅れないために必須ではないでしょうか。

四方を海で囲まれ、独自の魚食文化を築いてきた私たちにとって、昨今の温暖化による海の変化への対応が迫られる中で、今後もその文化を発展させ、継承させていくためには、そうした切り替えの時期ではないかと感じています。

マナマコの短期中間育成試験

豊田郡大崎上島町沖浦1138-1
大崎上島漁業協同組合

I 研究の目的と内容

1. 研究目的

(1) 研究グループの概要（具体的に記述すること）

当組合を含む3つの漁協で組織される豊竹水産振興協議会が実施しているメバル中間育成の飼育作業を担当するなど、栽培漁業に積極的に取り組んでいる。

また、県水産課の取締グループと連携して海上パトロールを行い、県外から侵入してくる密漁船の取り締まりに協力するなど、漁場管理にも取り組んでいる。

近年はマナマコの種苗生産試験に取り組んでいる町内の民間種苗生産業者と連携し、マナマコの中間育成試験に取り組んでおり、付着基質や垂下水深など育成条件の検討を行っている。

(2) 研究の動機と目的

昨年度行った中間育成試験では、長期にわたって中間育成を行うと網袋の中にカニ類の幼生が混入し、それらが網袋内で成長して稚マナマコの歩留まり低下の原因となる可能性が示唆された。

そこで網袋に混入するカニ類の幼生が成長して稚マナマコの生残に影響を与えるようになる前までの短期中間育成を行って放流し、直接放流する場合と比較することでその有効性を検証することを目的とした。

2. 研究内容及び研究方法

(1) 研究項目

- ①中間育成の有効性検証
- ②食害生物の発生状況調査

(2) 研究方法

- ①中間育成の有効性検証

中間育成を行わず放流した場合と3カ月の中間育成を行った後に放流した場合とで成長と生残を比較した。なお、放流は追跡調査を行うため、カキ養殖に用いられる丸カゴにカキ殻と稚マナマコを入れ、稚マナマコが自由に出入りできる状態でシェルマットに括り付け、海底に沈設する方法で行うこととし、沈設から1カ月後と3カ月後に引き上げ、残存した稚マナマコの計数と計測を行い、比較した。

- ②食害生物の発生状況調査

二重にした玉ねぎネットにカキ殻のみを詰め、中間育成と同じ条件で垂下し、定期的に取り上げて内部に発生したカニ類の計数と計測を行った。

II 研究結果

①中間育成の有効性検証

中間育成中の標準体長の推移は図1に示すとおりで、開始時 12.8mm から3カ月後には 25.0mm と約2倍に大きくなった。

また、中間育成中の生残率は図2に示すとおりで、2カ月後までに急激に低下し、2カ月後から3カ月後は横ばいであった。

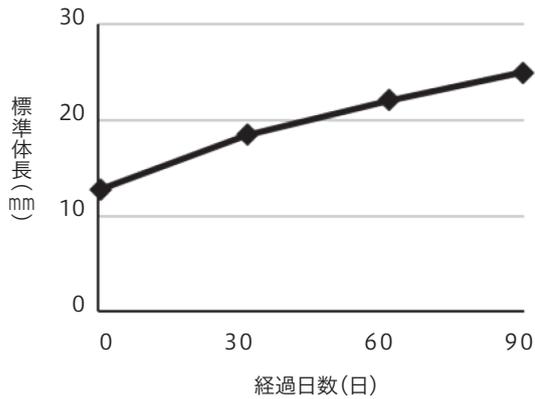


図1 標準体長の推移

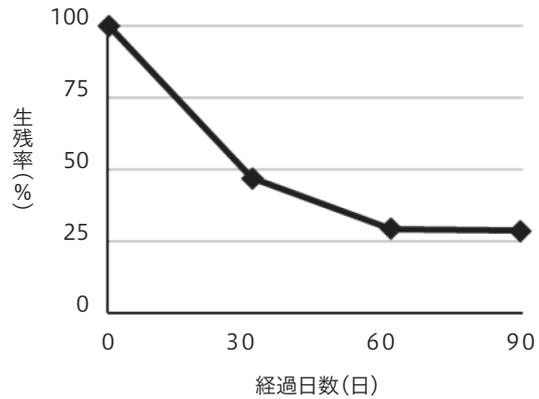


図2 生残率の推移

放流後の標準体長の推移は図3に示すとおりで、3カ月間で中間育成なしは 12.8mm から 22.4mm に、中間育成ありは 25.0mm から 36.1mm にそれぞれ成長した。

残存率の推移は図4に示すとおりで、中間育成の有無に関わらず概ね同様の減少傾向が見られ、どちらも3カ月後には 10%未満になった。

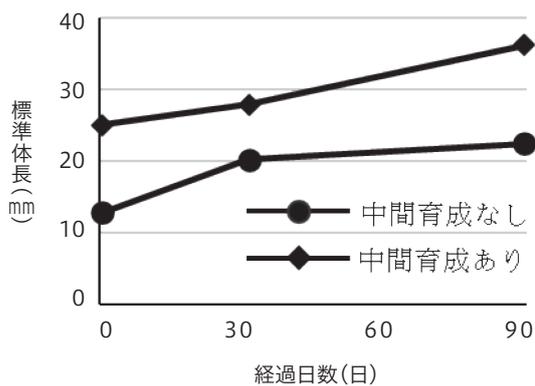


図3 標準体長の推移

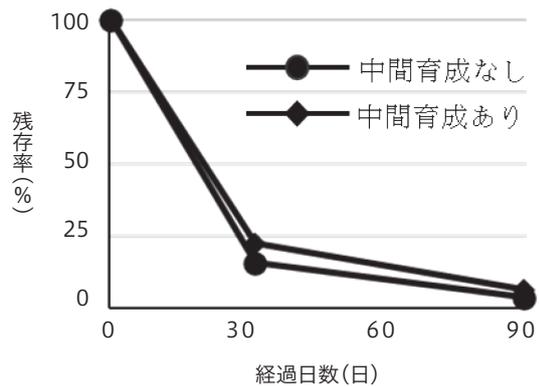


図4 残存率の推移

②食害生物の発生状況調査

カニ類の発生状況は表1のとおりで、11月以降にベニツケガニ類(写真1)、1月にはモガニ類(写真2)が確認された。

表1 カニ類の発生状況

調査月	ベニツケガニ類		モガニ類	
	匹数	甲幅 (mm)	匹数	甲幅 (mm)
8月	0	—	0	—
9月	0	—	0	—
10月	0	—	0	—
11月	0	24.1	0	—
12月	0	28.5、30.8	0	—
1月	0	37.9	1	16.0



写真1 ベニツケガニ類



写真2 モガニ類

III 考察

中間育成中の生残率は昨年よりやや低い結果となったが、初期に低下してその後横ばいになるという傾向は昨年と同様であった。収容密度は昨年好成績が得られた密度としたが、試験に用いた稚ナマコの標準体長が昨年と比べて約3倍大きかったため、収容重量が過大になり、生残率に影響したものと考えられる。種苗生産施設で生産・販売される人工種苗は年によって多少の大小差があるので、実際に使用する種苗の大きさに応じて収容密度を調整する必要があり、そのためには大きさ別の適正密度について検討する必要がある。

標準体長は3カ月間で約2倍となったが、7月から10月という一年間で最も水温の高い時期にも関わらず一定の成長が得られたことで、本手法による中間育成が有効であることの再現性が確認された。

放流後の追跡調査として引き上げた丸カゴとシェルマット内に残存していた稚ナマコは、中間育成の有無に関わらず、3カ月後で10%未満と少なかったが、へい死して減耗したのではなく、沈設場所の周辺には捨て石等の稚ナマコの生息に適した基質が多くあることから、速やかに分散していったものと推察される。ただし、実際に稚ナマコが分散の様子を確認したわけではないので、来年度はタイムラプスカメラを用いて放流直後の動態の観察を試みる予定である。

食害生物の発生状況調査では、試験開始から4カ月後の11月以降に、水槽実験で稚ナマコを攻撃することが確認されているイシガニの近縁であるベニツケガニ類と、稚ナマコを食害することが知られているオオヨツハモガニの近縁であるモガニ類が確認された。ベニツケガニ類はトリガイ養殖においてコンテナ内に侵入し、トリガイを食害することが知られており、本調査においても攻撃的な行動が確認されたことから、中間育成中の稚ナマコの生残にも影響があるものと推察される。このことから、本手法で中間育成を行う場合は3週間程度、10月頃までに留めることが望ましいと考えられる。

今回の調査では、稚ナマコの減耗要因となるカニ類以外に、ゴカイ類やエビ類などの餌料生物が多く見られた。これらが増えれば有用水産動物の増殖が期待できることから、来年度はカキ殻を用いた簡易魚礁を港内に設置し、餌料培養効果と稚ナマコの生息場所としての有効性を検証するための調査を予定している。

令和5年度水産資源保護啓発研究事業(巡回教室)

漁業者セミナー
おいしいウニを育てる ～どんな餌を与えるか、身溶けをどう防ぐか～

岩手県漁業士会 釜石支部
岩手県沿岸広域振興局水産部水産振興課

開催日時 令和5年10月6日(金) 15:00～17:00

開催場所 岩手県水産技術センター (岩手県釜石市大字平田3-75-3)

講師氏名 鵜沼 辰哉 氏
東北大学大学院農学研究科 水圏動物生理学分野 教授

講演要旨

【ウニの特性を考慮した養殖】

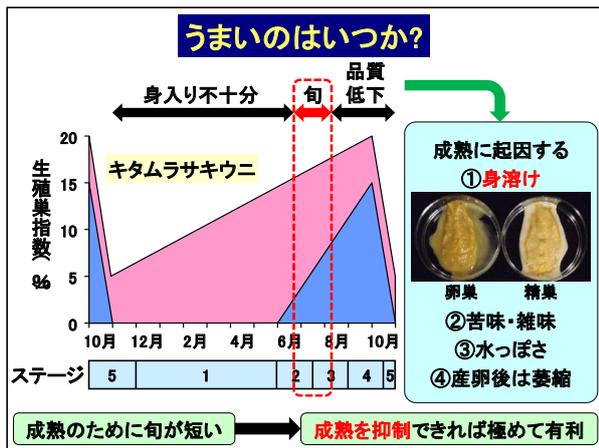
瘦せウニは給餌により身入りを回復させることができるが、生産経費がかかるため、天然ウニと同じ時期に同じ値段で売るのではなく、天然ウニが品薄となる産卵期前後に高価格で販売するのが良い。ウニは成熟すると生殖巣から卵や精子が溢れ出す「身溶け」と呼ばれる現象が起り、商品価値を失うためである。成熟を抑制すれば、身溶けを防いで産卵期でも出荷できる。

【どんな餌を食べさせるか】

ウニ養殖には保存が可能な餌料が必要であるが、加工した海藻を摂餌したウニは身入り、色調、食味が劣るとされてきた。これまでの研究により、湯通し加工した海藻を用いると身入りと色調は生鮮海藻と同等になることがわかったが、食味は生鮮海藻を給餌したものと比較して苦くなるという結果が得られた。加工海藻では、甘味・うま味アミノ酸を多く含む遊離アミノ酸が海水中で流出することにより、タンパク質構成アミノ酸に多く含まれる苦味アミノ酸の割合が相対的に高くなり、これがウニの生殖巣に蓄積するためである。そこで、甘味・うま味アミノ酸が多く、それらが海水中でも流出しない餌を探した。その結果、ハクサイ等の生鮮野菜やゼラチン入り配合飼料が有効であることがわかった。これらの餌をそれぞれキタムラサキウニに給餌する実験を行ったところ、甘味が強くなり、苦味は軽減された。ただし、生鮮野菜は長期の保存に向かないため、長期保存可能なゼラチン入り配合飼料の開発が期待されている。

【身溶けをどう防ぐか】

ウニの成熟は、温度や光周期を調節することにより抑制できる。温度を調節(とくに冷却)するには冷却器、海洋深層水、地下海水などを利用すれば良いが、大きな設備投資やランニングコストが問題となるほか、場所が陸上養殖に限られる。これに比べて、光周期の調節であれば比較的安価に利用でき、とくに長日処理が有効なら海面でもソーラーパネルと蓄電池を用いて実施できる。どのような光周期がウニの成熟を抑制するのかを調べるため、日長が最も長くなる6月中旬から4つの日長区(短日区、日長減少区、日長増加区、長日区)に分けてキタムラサキウニの飼育を行った。自然日長を模した日長減少区では9月中旬に成熟したが、日長増加区と長日区では10月中旬まで成熟せず、とくに、短日区では11月中旬まで成熟しなかった。また、別の実験では、照明を点けたままにする全日明期や、水槽を遮光幕で覆ったままにする全日暗期といった簡易な方法でも、成熟を抑制できることがわかった。



7

北日本の磯焼け

- ◆ 栄養蓄積不十分で商品価値なし(痩せウニ)
- ◆ 短期養殖で身入りを向上させることは可能
- ◆ 痩せウニを除去すれば磯焼けからの回復の一助
- ◆ 養殖ウニ(高い飼育経費)を天然ウニ(獲るだけ)と同じ価格で売っても儲からない

撮影:高橋和寛

8

天然ウニより高く売らないと儲からない

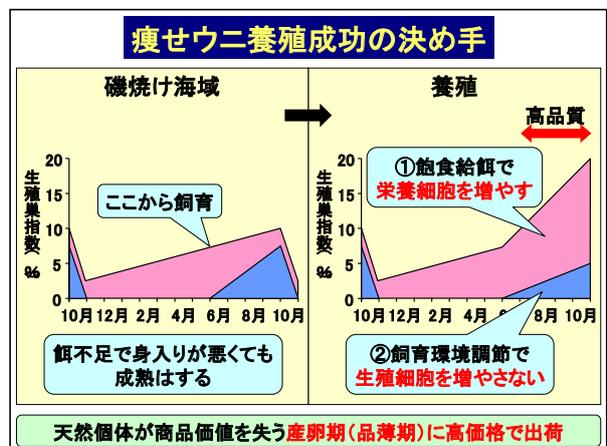
	天然ウニ	養殖ウニ
漁獲経費	X	X+α円
養殖施設費	—	324円
餌料費	—	450円
燃油代その他	—	102円
合計	X	X+876+α円
殻付き1kg当たり出荷価格	夏(旬) 1500円	秋(産卵前後) 1500円
		もしあれば3000円!

後志地区水産技術普及指導所の協力を得て試算

ウニ加工業者聞き取り

天然ウニとの競合を避けて旬の天然ウニより高く売る

9



10

- ### 痩せウニ養殖成功のために必要な研究
- ①飽食給餌で**栄養細胞を増やす**(質も向上)研究
↓
「何を食べさせればよいか」を明らかに
(2. どんな餌を与えるか)
 - ②飼育環境調節で**生殖細胞を増やさない**研究
↓
「何をどう調節すればよいか」を明らかに
(3. 身溶けをどう防ぐか)

11

- ### 「1. ウニの特性を考慮した養殖」まとめ
1. 生殖巣の粒粒の中には**栄養細胞**と**生殖細胞**であり、食品として**重要なのは栄養細胞**。
 2. 成熟して**生殖細胞が増える**と**身溶け・味の劣化**により品質は低下。
 3. **成熟を抑制しながら養殖**できれば天然個体が商品価値を失う産卵期(品薄期)に高価格で出荷できるはず。
 4. 痩せウニ養殖成功のためには**栄養細胞を増やす**研究と**生殖細胞を増やさない**研究が必要。

12

1. ウニの特性を考慮した養殖
 2. どんな餌を与えるか
 (休憩)
 3. 身溶けをどう防ぐか

13

「2. どんな餌を与えるか」まとめ

1. 海藻中の遊離アミノ酸(ダシ)にはうま味・甘味アミノ酸が多く、蛋白質には苦味アミノ酸が多い。
2. 加工海藻を給餌するとウニが食べるときにはダシが抜けて苦味アミノ酸が多いダシガラになっている。
3. ダシの出ないダシ昆布が理想の餌だが作るのは困難。
4. 野菜にはアミノ酸バランスが悪くないものもあり、風味に癖が生じないハクサイの実用性が高い。
5. ゼラチンのアミノ酸バランスは海藻に近く、長期保存可能なゼラチン入り配合飼料の開発が必要。

34

1. ウニの特性を考慮した養殖
 2. どんな餌を与えるか
 (休憩)
 3. 身溶けをどう防ぐか

35

「3. 身溶けをどう防ぐか」まとめ

1. 夏から秋に向けて長日でも短日でもキタムラサキウニの成熟を抑制でき、極端な長日、日長増加、短日の効果が高い。
2. 光周期調節を取り入れた養殖手法を開発すれば、最も高価格が期待できる産卵期を含めた周年出荷も実現可能。
3. 東北地方では各地で光周期調節を試験導入。

55

メンバー紹介

<p>実験担当者(五十音順)</p> <p>水産研究・教育機構 高木 聖実・長谷川 夏樹 町口 裕二・村田 裕子</p> <p>北海道立総合研究機構 麻生 真悟・金田 友紀 菅原 玲・高橋 和寛 中島 幹二・成田 正直 宮崎 亜希子</p>	<p>共同研究機関(五十音順)</p> <p>岩手県水産技術センター 神恵内村</p> <p>水産研究・教育機構 東北大学大学院 北海道立総合研究機構</p>
--	--

本研究の一部は下記事業で行った
 農林水産技術会議「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業」
 生物系特定産業技術研究支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」

56

受講者数

漁業者	23名(うち漁業士 8名)
漁協職員	8名
大学職員	1名
県職員	20名
計	52名

事業の紹介

水産防疫対策委託事業

当協会では農林水産省より『令和6年度水産防疫対策委託事業（養殖水産動物の診療体制の整備）』の委託を受け、令和6年度養殖衛生管理技術者養成研修を開催いたしました。

令和6年度養殖衛生管理技術者養成研修 概要

研修名：養殖衛生管理技術者養成本科コース研修(基礎、実習、専門の3コース構成)

目的：現在の国内防疫を担う都道府県職員や漁業協同組合の職員、今後の国内防疫へ寄与すると考えられる獣医師等を対象に、養殖水産動物の診療に必要な専門的技術等についての研修を実施し、技術者の育成を図る。

受講対象：地方公共団体等が推薦する者。又は、養殖業関係団体等が推薦する者等であって、養殖衛生管理対策等に協力する者。

開催時期：基礎コース：令和6年6月25日（火）～7月5日（金）

実習コース：令和6年8月19日（月）～8月30日（金）

専門コース：令和6年11月6日（水）～11月13日（水）

※実習、専門コースの受講には、基礎コースのすべての科目の受講が必要。

実施報告

○令和6年度養殖衛生管理技術者養成 本科実習コース研修

開催日時、場所：(1) ウイルス実習、細菌実習

令和6年8月19日（月）～23日（金）

東京海洋大学品川キャンパス6号館4階 大学院学生実験室401
（東京都港区港南4-5-7）

(2) 真菌実習ならびに寄生虫実習

令和6年8月27日（火）～30日（金）

日本獣医生命科学大学D棟（4号棟）第324実習室
（東京都武蔵野市境南町1-7-1）

(3) 特論・演習

令和6年8月26日（月）

日本水産資源保護協会 会議室
（東京都中央区明石町1-1 東和明石ビル3階）

令和6年度養殖衛生管理技術者養成本科実習コース研修 科目及び講師

科目	時間	氏名	所属
細菌	12	廣野 育生 近藤 秀裕 小祝 敬一郎	東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科
ウイルス	12	佐野 元彦 坂本 崇 片桐 孝之 加藤 豪司	東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科
真菌	10	倉田 修	日本獣医生命科学大学獣医学部
寄生虫	10	良永 知義 伊藤 直樹 渡邊 勇歩	東京大学大学院農学生命科学研究科
特論・演習	2	梅田 奈央子	株式会社ニッスイ
合計時間数	46		

(敬称略)

○特論・演習内容：ウェアラブルカメラを用いた遠隔診療に関する技術研修

令和6年度養殖衛生管理技術者養成本科実習コース 受講者 30 名

北海道	岡田 のぞみ	地方独立行政法人北海道立総合研究機構 栽培水産試験場
青森県	鳴海 一侑	地方独立行政法人青森県産業技術センター内水面研究所
秋田県	加藤 雄平	秋田県水産振興センター 総務企画室 総務企画チーム
山形県	富樫 宥哉	山形県内水面水産研究所
福島県	瓜生 純也	福島県水産資源研究所 種苗研究部
茨城県	水谷 宏太	茨城県水産試験場
栃木県	村井 涼佑	栃木県水産試験場
群馬県	井下 眞	群馬県水産試験場川場養魚センター
千葉県	舘小路 紗礼	千葉県水産総合研究センター生産技術研究室
東京都	高橋 侑大	公益財団法人東京都農林水産振興財団 奥多摩さかな養殖センター
東京都	根本 早登	東京都総務局小笠原支庁産業課 小笠原水産センター
神奈川県	岩崎 菜美	神奈川県水産技術センター
石川県	齋藤 亨一朗	石川県水産総合センター 生産部志賀事業所
福井県	綿谷 朋紘	福井県水産試験場栽培漁業センター
長野県	下山 諒	長野県水産試験場 増殖部
岐阜県	山藤 匠	岐阜県水産研究所
静岡県	富山 皓介	静岡県水産・海洋技術研究所富士養鱒場
愛知県	小島 諒也	愛知県水産試験場 内水面漁業研究所 三河一宮指導所
三重県	坂下 奨悟	三重県農林水産部水産研究所
和歌山県	賀集 健太	和歌山県水産試験場
徳島県	木本 翔	徳島県立農林水産総合技術支援センター水産研究課
高知県	福井 天基	高知県庁水産振興部 宿毛漁業指導所
福岡県	植田 ひまわり	福岡県水産海洋技術センター内水面研究所
佐賀県	松本 日向乃	佐賀県玄海水産振興センター
長崎県	岩崎 亮磨	長崎県総合水産試験場 環境養殖技術開発センター 養殖技術科
大分県	原 朋之	大分県農林水産研究指導センター水産研究部
宮崎県	岩尾 豊	宮崎県水産試験場
漁協	首藤 冴哉	東町漁業協同組合
民間	小川 諒也	株式会社サン・ダイコー 水産営業部
民間	河島 奈悠	日生研株式会社

(敬称略)

○令和6年度養殖衛生管理技術者養成 本科専門コース研修

開催日時：令和6年11月6日(水)～13日(水)

開催方法：対面もしくはオンライン(Zoom)

場所(対面)：公益社団法人日本水産資源保護協会 会議室

(東京都中央区入船3-10-9 新富町ビル5階)

令和6年度養殖衛生管理技術者養成本科専門コース研修 科目及び講師

科目	時間	氏名	所属
魚類免疫学	6	高野 倫一	水産研究・教育機構 水産技術研究所 病理部
魚類病理学	6	三輪 理	水産研究・教育機構 水産技術研究所 病理部
魚類生理学	6	大久保 範聡	東京大学大学院農学生命科学研究科
魚類飼養学	6	佐藤 秀一	福井県立大学海洋生物資源学部
魚類薬理学	6	舞田 正志	東京海洋大学

科目	時間	氏名	所属
特論・演習Ⅰ	2	原川 翔伍	愛媛県農林水産研究所水産研究センター魚類検査室
特論・演習Ⅱ	2	古下 学	水産研究・教育機構 水産大学校 食品科学科
特論・演習Ⅲ	2	水野 芳嗣	株式会社媛すい
合計単位数	36		

(敬称略)

特論・演習内容

特論・演習Ⅰ(講義)：診断現場の実情

特論・演習Ⅱ(講義)：ビブリオ分離の諸問題と薬剤感受性について

特論・演習Ⅲ(演習)：水産防疫に関する意見交換(課題発表と意見交換)

令和6年度養殖衛生管理技術者養成本科専門コース 受講者32名

北海道	井上 智	地方独立行政法人北海道立総合研究機構水産研究本部
秋田県	加藤 雄平	秋田県水産振興センター 総務企画室 総務企画チーム
山形県	千葉 春輝	山形県庄内総合支庁産業経済部水産振興課
福島県	瓜生 純也	福島県水産資源研究所 種苗研究部
東京都	間宮 宝	公益財団法人東京都農林水産振興財団 東京都栽培漁業センター
東京都	柴田 悠希	東京都産業労働局島しょ農林水産総合センター八丈事業所
東京都	浅見 優斗	東京都産業労働局島しょ農林水産総合センター大島事業所
東京都	野中 俊希	東京都総務局小笠原支庁産業課小笠原水産センター
石川県	齋藤 亨一朗	石川県水産総合センター 生産部志賀事業所
福井県	西村 碩教	福井県栽培漁業センター
福井県	竹内 一貴	福井県水産試験場内水面総合センター
静岡県	富山 皓介	静岡県水産・海洋技術研究所富士養鱈場
愛知県	小島 諒也	愛知県水産試験場 内水面漁業研究所 三河一宮指導所
滋賀県	寺井 章人	滋賀県水産試験場
京都府	淵 隼斗	京都府水産事務所
京都府	鈴木 千恵	京都府農林水産技術センター海洋センター
島根県	雑賀 達生	島根県水産技術センター内水面浅海部内水面科
岡山県	横山 貴洋	岡山県農林水産総合センター水産研究所
広島県	上原 達亮	広島県立総合技術研究所 水産海洋技術センター 水産研究部
徳島県	木本 翔	徳島県立農林水産総合技術支援センター水産研究課
高知県	加藤 晋作	高知県庁水産振興部中央漁業指導所
高知県	大槻 晃己	高知県水産振興部宿毛漁業指導所
高知県	福井 天基	高知県水産振興部宿毛漁業指導所
福岡県	植田 ひまわり	福岡県水産海洋技術センター内水面研究所
佐賀県	松本 日向乃	佐賀県玄海水産振興センター
大分県	岡田 理	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部 北部水産グループ
沖縄県	玉城 正国	沖縄県水産海洋技術センター
漁協	首藤 冴哉	東町漁業協同組合
民間	世古 優太	バイオ科学株式会社
民間	中司 大智	株式会社極洋 資源開発部
民間	松尾 篤志	株式会社ツナドリーム沖縄
民間	橋本 伸一郎	株式会社ツナドリーム五島

(敬称略)

私とSDGs

【YS】私と家族とSDGs

2015年に採択されたSDGs（国連持続可能な開発目標）は、スタートしてから早10年目を迎えようとしている。SDGsの実施年限は2030年だから、まだあと5年ちょっと、残されていることになる。

「へえ、そうなんだ。知らなかった。」

今回SDGsについてコラムの執筆依頼を受け、人生で初めて「SDGs」というワードをグーグル検索しての感想である。いくつかのサイトでは個人で推奨されている活動も紹介されているようだ。

「遅ればせながら今からでも間に合うかもしれない。」真面目な私はさらに調べを進めていく。ヒットした内容をいくつか紹介させていただこう。

1. 節電について。「使用後はこまめに電源を消す」「使っていない電源プラグを抜く」

2. 節水について。「食器を洗う時は水の使用量を意識する」

ここで突然、私事であるが、私は学生結婚して以来3人の子を立て続けに出産育児に日々奮闘してきた。その身からすると節電、節水は当たり前すぎて拍子抜けしてしまう内容だ。

3. 紙の削減について。「支払いはクレジットカードや電子マネーでの決算を」

4. フードロスについて。「冷凍を活用してロスを抑える」

5. プラスチックの使用を減らす。「マイボトルやマイバックを持ち歩く」

ここでまた、あまのじゃくの私は何も思わずにはいられない。

「世界では電子決済がスタンダード。また日本経済が30年間も衰退し続けている中、家計をやりくりしている平均収入世帯の主婦は冷凍やマイバッグ持参の癖が染み付いてしまって悲しいくらいなんですけど。」

ともかく私の心配は杞憂に終わった。それどころかSDGs構想がない時代から自ら率先して個人でただ一人、黙々と孤独な活動をし、闘い続けていたとは。ただやりすぎは禁物。家計のため、ひいては家族のためと正義の剣を振りかざし、至極当然としてきた活動もやはりほどほどがいいらしい。世相を反映してか、我が家にも不穏な空気が流れる日があるようなないような。病は気から。家族には健康であってほしい。とりあえず今日の夕食では値引きシールが付く前の美味しいお刺身を購入して家族に振舞おう。

【HH】冬の訪れ

暖かい日が続いていたかと思ったら、いつの間にかだいぶ冷え込むようになり、あっという間に冬がやってきましたね。我が家には15歳になる猫がいます。

普段は別の場所で寝ている猫が、寒くなるとヒザの上に乗るようになります。私はこれで毎年冬の訪れを感じていたのですが…。ここ数年は押し入れが冬のお気に入りの場所のようで、ふわふわの膝掛けで準備万端の私の横を素通りしていきます。ちょっと寂しいですが我慢することにしました。猫は気まぐれですからね。きっとまた何事もなかったかのようこちらにやって来ることでしょう。

猫の15歳は人間でいうと76歳くらいになると何かに書いてありました。無理に抱っこをしてストレスを与えるより、自由に過ごしていつまでも元気でいてくれるほうが嬉しいかな。

さて、冬の話をもう一つ。

先日、とある町会の「もちつき」のお手伝いをしてきました。天気も良く、風も無かったので絶好の餅つき日和となりました。大人達は皆のために汗をかきながら必死に、子供達は小さな杵を手を楽しそうに餅をついています。

さあ、そろそろできあがり。

ずっと外にいるとさすがに冷えてくるので、まずは熱々のお雑煮からいただきます。うーん、温まる～、おもち柔らかっ！

続いて、きな粉にあんこ、海苔と醤油ってなんでこんなに合うんだろう！一通り食べて飲んで大満足の一日となりました。

コロナ禍で中止になった時期もありましたが、楽しい時間と笑顔が戻って良かったなあと感じました。

この地域では、夏になると江戸三大祭りの一つと言われる大きな祭りが行われます。古くから住んでいる人も、新しくこの街にやって来た人も協力し合い、祭りや町会行事を楽しんでいます。

この伝統がいつまでも続きますように。そして次の世代に引き継いでもらえるよう、私ももう少しだけ頑張りますね。



(公社) 日本水産資源保護協会は以下の規格の認証機関として認められています。

MELJapan : 『マリン・エコラベル・ジャパン』 (Marine Eco-Label Japan)



FAO (国際連合食糧農業機関: Food and Agriculture Organization of the United Nations) の持続可能な漁業の認証のガイドラインに基づき、ISO 認証の仕組みに沿った認証制度です。

*スキームオーナー 「一般社団法人 マリン・エコラベル・ジャパン協議会」

*規格とその認証の仕組みを所有し、運営・維持する主体

AEL : 『養殖エコラベル』 (Aquaculture Eco-Label)



持続可能な養殖業の発展に資するため、FAO の養殖認証に関する技術的ガイドラインに基づき、ISO 認証の仕組みに沿った認証制度です。

スキームオーナー 「一般社団法人 日本食育者協会」



● 受託検査のご案内 ●

公益社団法人日本水産資源保護協会では、水産分野のさまざまな検査を行っています。

当協会では、以下の検査を受託しています。検査の申し込み・詳細は下記までお問い合わせ下さい。

● 錦鯉関連検査

1. コイヘルペスウイルス (KHV) PCR 検査
2. コイ科魚類特定疾病検
3. 中国向け輸出錦鯉検査

● 種苗検査

1. ヒラメのクドア (*Kudoa septempunctata*) 検査

● 輸出前検査

1. 中華人民共和国向け輸出活水産物の目視検査
2. 台湾向け輸出水産動物の魚病検査
3. 大韓民国向け輸出水産動物等の魚病検査
4. カナダ向け輸出餌料用天然マサバ (内臓付き) の目視検査
5. ロシア向け輸出水産食品魚病検査 (活魚介類検査)
6. ベトナム向け輸出活水産動物の検査

● 上記以外の臨時検査 (令和元年から令和5年9月まで)

魚類: カンパチ、チョウザメ類、トラフグ、ニジマス、ナマス、フナ、など

貝類: アワビ類など

● 検査方法

農林水産省「特定疾病等対策ガイドライン」、国際獣疫事務局 (WOAH) 監修の疾病診断マニュアルなどに準拠した方法を用います。検査結果は日本語表記あるいは日英文併記の結果報告書を発行します。

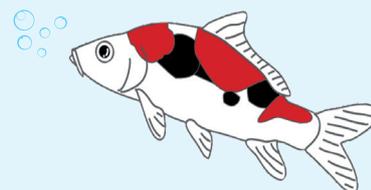
● 受託検査に関するお問い合わせ・資料請求

公益社団法人 日本水産資源保護協会 受託検査担当

TEL : 03-6280-5033 FAX : 03-6280-5034

E-mail : kensa@fish-jfrca.jp

ホームページ : <http://www.fish-jfrca.jp/>



<編集後記>

2025年がスタートしました。今年の干支は乙巳(きのと・み)です。

乙巳をインターネットで調べてみると、「努力を重ね、物事を安定させていく」という意味合いを持つ年であるとありました。別のところには、「努力や準備が実を結び始める時期を示唆している」と示されていました。乙(きのと)は成長過程を、巳は成果を示していることから、これまでの努力や準備が実を結び始める時期に当たるとのことでした。

これを見て、「今年は水産業界にとって、さらに良い年になってくれるのでは」と、期待をしないではいられませんでした。

2025年が干支にあやかって、景気の良い一年になることを願っています。

公益社団法人日本水産資源保護協会 季報担当

FOOD STYLE Kyushu 2024

「FOOD STYLE Kyushu」に復興水産加工業販路回復促進センターとして出展しました。

令和6年度復興水産加工業等販路回復促進指導事業として、「九州の食を全国へもっ!全国の食を九州にもっ!」をスローガンとした、西日本最大級の展示会である「FOOD STYLE Kyushu 2024」に復興ブースを設け、東日本大震災被災地の水産加工業者12社が出展しました。

今回出展者には、水産物の安全性や福岡(九州)のバイヤーや消費者の動向についてをテーマとした講習会を受講していただき、その学んだ内容を「展示商談会」において、実践していただきました。



復興水産加工業販路回復促進センターでは、
東日本大震災の被災地における水産加工業等の復興を支援し、
販路回復を望む水産加工業者等の皆様をサポートいたします。

令和6年度みんなでやるぞ内水面漁業活性化事業

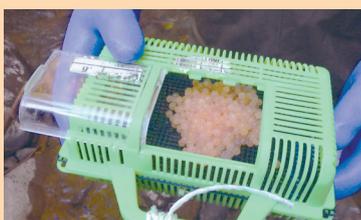
地域に密着した人材をコーディネーターとして配置し、釣り人との連携やゾーニングによる漁場管理の拡大、ICT遊漁券システムにより収集した遊漁者の動向等のデータを活用した漁場管理の高度化、ICT遊漁券アプリを活用した遊漁者の呼び込みなど、効率的な漁場管理や内水面漁業活性化の方法の検討や実行を進めるため、今年度からスタートした「みんなでやるぞ内水面活性化事業」の現地調査が行われました。



○和歌山県内水面漁
(企業研修プログラム
で行った人工河川清
掃後の産卵現場)



○米代川水系サクラ
マス協議会
(ドローンを使用し
て紙券の監視業務
効率化)



○原野谷川漁協
(企業研修プログラ
ムの実施)



公益社団法人 日本水産資源保護協会

東京都中央区入船3-10-9 新富町ビル5階

○東京メトロ【有楽町線】「新富町」駅下車 徒歩 2分
【日比谷線】「築地」駅下車 徒歩 5分

※令和6年9月17日(火)より、新事務所に移転いたしました。

令和7年1月31日発行

発行 — 公益社団法人 日本水産資源保護協会

●連絡先

〒104-0042

東京都中央区入船3-10-9

新富町ビル5階

TEL 03(6280)5033

FAX 03(6280)5034

【振替口座】00120-8-57297

企画・編集 — 公益社団法人 日本水産資源保護協会
制作・印刷 — 株式会社 生物研究社